

つくしあい理念の矛盾と曖昧

鈴木晋怜

はじめに

率直に言って、「なぜ」「今」「また」「つくしあい」なのだろうか。

この素朴な疑問は、おそらく宗内の多くの人たちが抱いていることだろう。果してどれくらいの人が「さあ、今こそ、つくしあい運動を推進しよう」と熱い情熱をもって叫んでいるというのか。少なくとも若い世代の間では皆無に等しいと思われる。

筆者は、「つくしあい運動」それ自体を否定するものではない。確かに昭和四十年代半ばに提唱された当時は、この運動はそれなりの必然性をもっていただけと思う。また、この理念および運動を創唱し、推進した先輩達の熱意には敬意を払うものである。しかし、あれから既に四半世紀を経過した現在、まさに冒頭にも述べたように「なぜ」「今」「また」「つくしあい」を推進させようとするのか。そこが理解できないのである。

「つくしあい運動」に対しては、宗内の認識に大きなズレが存在している。それは、「つくしあい運動」は頓挫した

という認識と、今に至るまで連続して存続しているという認識である。この二つの認識のズレを抱えたままで「つくしあい運動」を議論の俎上にのせても、出発点となる認識がズレているのであるから、うまく議論がかみ合わないのは当然であろう。またこの認識のズレを抱えたままで、この運動を宗団として推進していこうとすることは、さらなる無理が生ずると言わざるを得ない。

また、「つくしあい運動」は頓挫したという認識をもっている人（筆者はこの立場に立つ人の方が多数を占めると思うし、筆者自身もこの立場である。）の中でも、その原因をめぐっては、必ずしも明確な形で考察がなされていないように思われる。そしてそこにこそ、この問題に決着をつけられないもどかしさがあるのだ。

そこで本論では、「つくしあい運動」のどこに問題点があったのかということについて、特にその理念およびそれがつくられた成因に焦点をあてて考察してみたい。

一、「つくしあい運動」の成り立ちに潜む矛盾

昭和四十六年に発行された「つくしあい手帳」によれば、「つくしあい運動」が創唱されるに至った成因として、宗団の内的成因と宗団の外的機縁の二種があげられている。そのうち、宗団の内的成因とは、教化団体としての宗団の独自の教化ビジョンの必要性であり、いわば、智山派の宗団アイデンティティとも言うべき教化理念を作り出さなければならぬという要請である。そしてこの要請は、当時の那須尻下の次のようなご要望に基づくとされている。

①真言密教の大本は、生命が自己のものでなく如来のもの（法身の慧命）であることを自覚することにある。この自覚に立って素直に謙虚に一生懸命（三摩地）人間が仕合わせに生きるため励むことが肝要である。

②ところが現代の世相の混迷は、この生命の真実を知らないがため、心ない連中の「思い上がり」から現出したものである。

③ところで、世相の混迷を正し、社会の和平と人類の幸福を築くためには、「生命のすべてを如来に託しきった心」にならしめなくてはならぬ。ここに僧伽意識の高揚が要請される。

④僧伽は仏の教えを信じ仏の道を歩むことによって社会の和平と人類の仕合わせを達成しようとする同志の集まりである。

⑤この面に新しく注目して今こそ本宗は僧俗一体の信仰運動を展開していかなくてはならぬ。

このご要望からは、那須幌下の、当時の宗団のとりまく状況に対する危機意識を読みとることができる。すなわち、混迷した世相を本宗の信仰運動によって正し、社会の和平と人類の幸福を築いていかなければならないとする強い意志である。このご要望を受けて、本宗は信仰運動を展開することになった。そして、それは前述のように本宗独自のビジョンを志向するはずのものであったのである。

こうした宗団の内的な成因と同時に当時の宗団の外的な機縁としては、次のような事柄があげられている。それは一つは、他の伝統教団の動向であり、もう一つは、新興宗教の動向である。

当時、日蓮宗の護法運動・禅宗（曹洞）の三尊仏運動・臨済宗（妙心寺派）の花園会運動・浄土宗のおてつき運動・禅林寺派のみかえり運動・大谷派の同朋会運動・豊山派の光明曼荼羅運動・高野山真言宗の合掌運動・大覚寺派の写経運動・天台宗の一隅を照らす運動など多くの伝統教団で一斉に教化運動が展開されるようになった。

この各宗による教化運動の高まりの背景には、当時の社会状況に対する危機意識がある。それは、都市の過密化と

農村の過疎化によって、従来の地縁関係の深い檀家網が分離分断され、寺院の中核をなす伝統行事が行われにくくなるのではないかという危惧、あるいは、家制度の崩壊と連動して、特に都市部を中心に核家族化が進行し、おじいちゃん・おばあちゃんから子や孫へという家族間における宗教的感化が稀薄になる、従って、従来の家を単位とした教化から個人を単位とした教化へとシフトを移していくことの必要性も生じた。さらには、工業化社会・情報化社会の到来によって、功利性、便利性の追求が美德とされ、人々も現実的、実際的な生活レベルの向上を志向するようになり、宗教にもいわゆる現世利益のみを求める傾向が強くなったことに対する対応も要請された。こうした社会状況の変化に追従すべく伝統各宗では様々な教化運動が開かれたのである。

それに加えて、創価学会をはじめとする新興宗教の教線拡張による伝統教団への浸蝕という機縁もあった。檀家が菩提寺を離れて新興宗教へ入信することへの危機意識や、新興宗教を支持母体とする政党が国の様々な施策に対して強い影響力をもつことへの不安が生じた。また靖国神社の国家護持という全体主義体制への傾斜が、宗教界だけでなく、社会生活全般への危機として身辺に逼迫したということも指摘されている。

このように、「つくしあい運動」が創唱された背景には、智山派としての独自の教化ビジョンの確立という内的な要因と他宗派の趨勢ならびに新興宗教への対抗という外的な機縁の二つの要因があった。

従ってその理念の中には、当然、この二つの要因の影響が反映されることとなる。そしてこうした成り立ちの仕方、既に「つくしあい運動」が挫折する素地があったのではないかと思われるのである。すなわち、智山派独自の教化ビジョンの確立という他の教化理念とは格別されるものを創り出す要請と、社会状況への追従、あるいは新興宗教への対応という、謂わば時代に迎合し、その潮流に乗り遅れまいとする思惑とが「つくしあい」という一つの理念の中に同時に折り込まれてしまったのである。そして、この二つの動機が互に矛盾は、いみじくも「つくしあい」の理

念の中にそのまま露呈することになる。次に少し詳しく「つくしあい」理念の内容について見てみよう。

二、「つくしあい」の本質に潜む曖昧

昭和四十六年に発行された教師用「つくしあい手帳」の第二章は、「つくしあい運動の本質」と題されており、この運動の理念が述べられている。その中で、「つくしあい」の語のもつ仏教的意味が根本（大乘根本の義）と究竟（秘密究竟の義）にわけて論ぜられているが、そのうち、宗派独自の教化理念の構築に直接的に関わってくると思われるのは、後者の究竟の箇所である。そこには次のように書かれている。

二、秘密究竟の義

①三密相应の生活実践

生命の真実は大日如来の境界であり、法身如来の体相用たる六大、四曼、三密がそれぞれ本来円融無碍に相即渉入し「つくしあっている」のが真相である。この大いなるいのち（法身大日如来）のはたらきと在り方を信仰生活の基本的実践方式として、おたがいの個性を尊重し、生命の一切を法身大日如来に託しきって、限りある所縁の生をありったけの力をつくして、おたがいの仕合わせとこの世の平和のため、一生懸命に精進努力していく、という義である。

②相互供養の生活実践

自身の源底である大日智法身（金剛界マンダラ）のうち成身会（根本会・羯磨会）に象徴的に表現される相互供養の実践として、無住所涅槃の生かしあう信仰生活を意味する。即ち本来自他は、法性として、生命として一

如平等であるから、他の一切を善友として供に築きあう生活。つまり自分を空しうして他を慈しみ、喜びをわかち施し施され、常に正法の興隆をめざしておたがいにより自己の特質を出しきって惜しみなく供養しあう、という義である。(傍線筆者)

この部分は、「つくしあい」理念において、その根幹をなす重要な部分であると考えられるが、何度、読み返してみても、本当は何を訴えたいのか伝わってこない。確かに、一つ一つの言葉は、美しい響きをもち、また文節を区切って読めば、それぞれの文節は意味をもったものとして理解できる。しかし、それが全体としてまとまった時に、一体何を言わんとしているのかが不明瞭となるのである。

例えば、①では、「おたがいの仕合わせとこの世の平和」のために、「おたがいの個性を尊重し、限りある所縁の生をありつたけの力をつくして…精進努力していく」ことが説かれている。つまり、この主張は、自己の個性を追求することが社会の幸福と平和につながるというものであり、社会という全体が十全に形成されるための必要条件として個性の追求ということを重要視している。また②においては、前段では「自分を空しうして他を慈しみ、喜びをわかち施し施され…」と説かれ、後段では「おたがいに自己の特質を出しきって惜しみなく供養しあう」ことの必要性が説かれている。自分を空しくすることと、自己の特質を出しきることが、果して生活実践の場面で両立することが可能かどうかは疑問であるが、ここでの主張は、どちらかと言えば、社会という全体を十全に形成するためには、自己を没個性化させ、全体の中に融合させるということを説いているように思われる。

これらの記述から窺えることは、個と全体の関係性、これは個と共同体、あるいは個と家族などと置き換えてもい、その二者の関係性が極めて曖昧だということである。個を重視するのか、あるいは社会・家族・共同体を重視

するのか。この曖昧性は、上述の箇所だけではなく、他の記述（例えば、教師用「つくしあい手帳」第二章 第二節の記述など）からも十分に伺い知ることができるのである。高邁な理念を卑近な例に当てはめるのは恐縮であるが、例えば、大きな寺に一人っ子として生まれ、周囲からは寺の跡継ぎとして期待され、囑望されている人がいたとする。しかし、本人には坊さんになること以外に自分のやりたいことがあり、その方面で生きていきたいと考えている。この場合、つくしあいの理念からすれば、彼はどちらを選択するべきなのだろうか。寺の跡継ぎとなれば、自分の特質を発揮できない。自分のやりたい道を選べば、寺の跡継ぎがいなくなり、寺の維持、運営あるいは家族の生活に困難が生ずる。どちらにとっても切実な問題である。お互いの個性を尊重することとお互いの仕合わせを築くこととは、そんなに簡単に両立しないのである。現実には絵空事ではない。

おそらく、こうした指摘については、次のような反論があるだろう。すなわち、個性と全体性が相克するというのは、いわゆる世間の立場からの考え方であって、出世間の立場からすれば、そんなことはあり得ない。シャンデリアの光のように一つ一つの電球の光が互いに妨げあうことなく、一つに溶けあって輝いている。雨あられ、雪や氷と変われども、溶ければ同じ谷川の水。

出世間の立場から世間を見る。この姿勢は宗教者として、ある意味では、自然な、あるいは、そうあるべきものかもしれない。しかし、それには相当な覚悟が必要である。祖師の教えをよりどころとし、その説かれたことを広めようとすること自体を否定するものではないが、もし、それを真剣にやろうとするなら、まず、自分自身が祖師の世界を生き、その厳しさを体験し、その世界を生きききするという覚悟をもたなければならぬのである。そうした覚悟のないまま、ただ教理の上澄みだけを掬いにとって高邁な理念をうたいあげても、少しも我々の心に響いてはこない。ましてや、僧俗一体の信仰運動などにはなり得ないのではないだろうか。俗の海にすっぽりとつかり、荒波の時だけ海か

らあがって高みから眺望する。これで果して悩み苦しむ人を救えるだろうか。一緒に荒波にもまれて苦惱を共にする方がより誠実だと言えるのではないか。あるいは、超然として敢えて社会を静観するという態度を貫く方がまだ真摯だと思われる。

世間と出世間を恣意的に使い分けることの欺瞞を我々は自覚しなければならぬし、その痛痒を感じてこそ、はじめて新しい信仰運動（この「運動」という発想も再考しなければならないが）への門が開かれるのではないかと思う。

三、宗教と社会との連関

宗教が社会に対してどのように関わっていくべきなのか、あるいは宗教が社会と関わるべきどのようなスタンスをもたなければならぬのか、ということがまず問われなければならない。さらに厳密に言えば、もし「つくしあい」運動が真言密教の世界観による社会の構築をめざしているのであれば、そこにおいては、真言密教と現代の社会思潮との関係を吟味しなければならない。また、僧俗一体の信仰運動をめざすのであれば、真言僧侶と社会人との関係を考えなければならない。僧伽の形成をめざすのであれば、宗団と社会との関係を考えなければならないのである。そして、その際、真言密教および僧侶は、社会および社会人に対して、どのような主体性をもつのかということその起点におかなければならない。すなわち、宗団および僧侶が社会および社会人を自らの世界観の内に引き込むのか、あるいは逆に、社会および社会人の内に宗団および僧侶が引き込まれるのか、あるいは両者の融合された新しい世界観を構築するのかという態度を決定しなければならないのである。

また、「つくしあい」運動を検証するという目的で実施された一連の総合調査において、これからの教化を進める

上での鍵として、地域性・経済性・人的資源という三つの要因が指摘されている。

そこにおいては、まず地域性に関しては、寺のおかれている地域的条件によって、教化の仕方が大きく異なるということが指摘されている。大都市にある寺院と農村部にある寺院とは、その文化的背景あるいは檀家の居住形態さらには生活様式が大きく異なっている。また、寺院によっては、その地域の特殊性あるいは個々の寺院に特徴的な信仰形態を有しており、当然、教化のあり方もそれぞれの状況に対応した方策が求められるのである。言葉を換えて言うならば、実際行われている様々な寺院活動は、純粋な意味での教理のみに基づくものではなく、その地域のもつ伝統的な習俗あるいは地域的特性と融合した形で創り上げられているものであり、従って、上からの画一的な理念および方法では、現実の教化場面にそぐわない可能性がある。

次に、経済性に関しては、各寺院の経済的基盤の大小によって、教化および教化体制のあり方が異なっているということが指摘されている。経済的基盤の脆弱な寺院では、教化に力を注ぐための物理的条件が整っておらず、寺院を維持していくことに汲々としてなかなか教化体制を十分に確立する余裕がないという現実がある。教化したくてもできないというジレンマを抱えている住職も多い。本宗寺院の経済的格差は顕著であり、これは一部の大寺院の論理すなわち教化をすればお金は後からついてくるといった発想は通用しない切実な問題なのである。

さらに、人的資源の問題は、上述の地域性・経済性という要因とも密接に関連するものである。教化の重要な担い手である住職、またそのみならず、将来の担い手として期待される子弟の研修機会が地域性・経済性の違いによって大きく異なっている。勉強したいと思っても、研修機会がない、あるいは、時間的余裕がなくて参加できないという声を耳にすることが多い。また先述のように、実際の教化場面では、それぞれの地域の特徴に根ざして教化が行われているにもかかわらず、研修場面においては、現実の教化に必ずしもそぐわない理念的な内容に終始する場合が多

く、参加してもあまりにならないという指摘もある。いずれにしても、もし宗団が教化宗団を標榜するのであれば、実際に教化を行う人材の養成をまず第一番に考えなければならぬと思われるのである。そして、その内容は、寺院のおかれた地域性を十分に考慮したものでなければならぬのである。

このように、宗団教化運動を展開していくためには、対社会的な視点、すなわち、宗教的理念型としての世界観をもつ宗団が現実の社会に対して、どのような関わり方をしていくのかということがまず問われなければならないし、さらには、宗団内部の問題、すなわち、寺院のおかれている地域的・文化的そして現実的な背景をもその射程に入れて運動理念を構築していかなければならないのではないだろうか。果して、「つくしあい」理念の構築過程において上記のような事柄が慎重に検討されていたかどうか、「つくしあい手帳」の記述を読む限りにおいては疑問を呈せざるを得ないのである。

四、「つくしあい」というスローガンの矛盾

言うまでもなく、「つくしあい」運動においては、この「つくしあい」という言葉がキーワードとして位置づけられ、この言葉の中に理念が集約されることを意図して設定されている。そしてこの名称の基本条件として、次のようなことがあげられている。

- 一、仏教精神が表現されていること
- 二、真言密教の教理が表現されていること
- 三、積極的姿勢の感ぜられること

- 四、日本語であること
- 五、現代語であること
- 六、平易な表現にして一見してその意の得られるもの
- 七、未来性のあるもの

これらの条件の内、筆者が問題としたのは、一および二と六との関係性についてである。もしこの「つくしあい」という言葉がこれらの条件を満たしているとすれば、この言葉のなかには、仏教精神と同様に真言密教の教理が表現されており、しかも、この言葉を一見することによってその意が得られなければならない。果してそんなことが可能だろうか。すなわち、一つの言葉の中に仏教精神のみならず真言密教の教理をも表現しようとすれば、必然的にその言葉は、きわめて抽象度の高いものでなければならぬ。そして、抽象という意味は、個々別々の具体的表象から共通の属性を抜き出して一般概念をつくることであるから、これまた必然的に漠然としてはっきりしない性質をもつことになる。従って、こうした抽象度の高い言葉によって、一見してその意を理解するということが不可能なのである。逆に言えば、一見してその意が得られるような言葉によって、甚々微妙なる仏教あるいは真言密教の教理を表現しようとするには無理があるのだ。こうした意味からするならば、上記の名称の基本的条件の内に既に矛盾する要件が含まれているということが言えるのではないだろうか。そして「つくしあい」という、ある意味では抽象的で、ある意味では具体的な言葉は、皮肉にもこの基本的条件が抱えている矛盾というものを端的に表現しているように思われる。

おわりに

これまで、「つくしあい」運動が全教師あるいは檀信徒の間に浸透しなかったのは、具体的な運動の展開の仕方や手続きにその原因があったとされ、そもその運動の成因や理念そのものには言及されなかったように思う。しかし、筆者には、「つくしあい」運動がうまくいかなかった原因はむしろ運動の成因や理念そのものの中にこそあったのではないかと思われるのである。「つくしあい」の理念は真言密教そのものであり、それを否定することは真言密教を否定することに他ならないという運動推進派の声を聞くことがある。しかし、筆者にはどうしてもこの「つくしあい」の理念が真言密教そのものを表現しているとは思えない。それは、これまで述べてきたように、運動の成因すなわち、宗団としての独自の教化ビジョンの確立と社会状況への追随という二つの動機が孕む矛盾がそのまま露呈したものであり、また宗教集団として社会にどのようなスタンスをとるのかという姿勢も曖昧で、結局どっちつかずの中途半端なものになっているように思えてならないのである。また、いいと思われるもの、必要と思われるもの、あれもこれも織り込もうとしたために、本当は何を訴えたいのかという焦点がぼけてしまっているように思われる。そしてこうした矛盾と曖昧が「つくしあい」という言葉の中に集約されているのではないだろうか。

真言密教には「即身成仏」という究極の目的と理念がある。もしスローガンを掲げるとするならば、この言葉こそ最適ではないだろうか。平易にする必要も現代語にする必要もないし、それを上から押しつける必要もないのだ。それぞれの住職が、また、それぞれの教師が自分でこれを解釈し、自分の言葉で檀信徒に語ればいいのである。そしてそれを可能にするような教育・研修体制を確立することが急務であり、これこそが宗団教化に結びついていくのではないだろうか。